

中古漢語における有声音の帯気性(1)  
—Karlgren氏とMaspéro氏の説をめぐって—

吉池孝一 中村雅之

二重子音の想定と単子音化の条件

吉池：われわれは、先の対談「漢語上古音の-r-介音」において、上古音に任意の子音CとlからなるCl-という二重子音を想定しました。Cl-は中古音で単子音となるわけですが、単子音化の条件として、Karlgren氏に拠り二種の有声音を認め、Cl-のうちCが有声有気音(*d*など)もしくは無声音(*t*など)のばあいlが落ち、Cが有声無気音(*d*など)のばあいCが落ちるとしました。

中村：Ka氏は、{C(有声有気音および無声音)+l-}のばあいlが落ちてC-となる。{C(有声無気音)+l-}のばあいCが落ちてl-となるとするわけですが、これはなかなか巧妙な想定です。これによって単子音化の条件が明確になっています。

吉池：そもそもKa氏はどうして二種の有声音を設定したのでしょうか。

中村：漢語現代方言の破裂音と破擦音の有気と無気の状態を説明するため、先ず中古の有声破裂音と有声破擦音を無気ではなく有気と見なしました。そして中古に有声有気の破裂音と破擦音を認めたならば、それにつながる上古に有声有気の破裂音と破擦音を設定するのは自然な成りゆきです。他方、藍 *glâm* > *lâm* のように中古で消失する有声の破裂音や破擦音の方を有声無気としたということでしょう。

後の研究者は中古音では音韻論的に有声無気と有声有気の対立がないことから、Ka氏の説を採用せず、中古の有声音に関しては有気音の記号を取り去ることが多いのですが、Ka氏が求めたものは音声そのものでしたから、この点は譲れないものだったと思います。特に、上古音には有声無気と有声有気の双方を設定しましたから、中古音における有声音が有気音であるかどうかはかなり重要な問題になります。

吉池：そのあたりの事情について、Ka氏の記述を確認するところからはじめましょう。

Karlgren氏の説—中古における有声有気の破裂音と破擦音

吉池：Karlgren(1915-1926; 1940)の251-254頁に「清濁跟送氣」という一項目があり有声破裂音の群母を例として有声有気と有声無気の問題について論じています<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> Karlgren, B. (1915-1926) *Etudes sur la phonologie chinoise*. Upsala. 本対談においては、趙元

中村：群母が g-ではなく g' であるという議論をとおして、他の有声破裂音や破擦音も、並母 b'、定母 d'、澄母 d'、從母 dz'、崇母 dz'、船母 dz' のように有声有気であることを述べている部分ですね。

吉池：はい。その有声有気の表記ですが、Karlgren (1915-1926) は g' のように見慣れない「'」とするのですが、Karlgren (1957) *Grammata Serica Recensa*. Stockholm. 1972(reprint) および Karlgren (1954) *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*. The Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm. 1970(reprint) では g' のように「'」とします<sup>2</sup>。後者によって表記したいところですが、漢訳の『中國音韻學研究』は g' のように「'」とするので、直接引用するばあいはそのまま「'」としたいとおもいます。もっとも、われわれの対談では g' としますがいかがでしょう。

中村：ややわかりにくい話になりますが、漢訳からの引用の g' は g' に読み替えて議論するということですね。承知しました。

吉池：Ka 氏は、群母（『中國音韻學研究』は郡とする）<sup>3</sup> は現代漢語方言で無声無気 k と無声有気 k' で現れるので、(ア) 群母 > k と (イ) 群母 > k' とします。問題は (イ) 群母 > k' の場合です。群母が直接 k' となる経路（群母 > k'）と、k を経て k' となる経路（群母 > k > k'）を想定することができます。しかしながら k を経たとすると、(ア) の k と合流することになるので不可とし、直接 k' となった（群母 > k'）とします。（以上趣意）

在多數方言中郡母後來讀成清塞音不是難解釋的事，印歐的 g 在日耳曼語裏頭也一樣的讀作 k，但是若論到 k' 的話，這個問題就更複雜了。我只能設想兩條變化的路，一條直接的路郡母 > k'，另外一條先走郡母 > k 的路，再由 k > k'。這第二條路是不能成立的，因為所有的方言總是有弱清 k 的，那麼就設法兒解釋為什麼由郡母變來的弱 k 會再向前變，而別的 k 都保留原狀了。並且在古代的材料裏也困難。在廣韻裏頭我們已經可以遇見許多不定的讀法的例，

---

任、羅常培、李方桂訳(1940)『中國音韻學研究』（再版 1948）の漢文と頁数を提示する。

<sup>2</sup> 有気の表記法は Karlgren (1915-1926) とそれ以後では異なる。Karlgren (1915-1926) は g' のようにある。これを『中國音韻學研究』は '（下から上にはねるのように）と記し、平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」(『中国文化叢書 言語』東京：大修館) 145-146 頁は '（上から下にはねるのように）と記す。Karlgren (1957) *Grammata Serica Recensa*. Stockholm. 1972(reprint) および Karlgren (1954) *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*. The Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm. 1970(reprint) は g' のように ' とする。

<sup>3</sup> いうまでもなく S512「帛三十字母例」によっても『韻鏡』「三十六字母」によっても牙音全濁音の字母名は“群”であるが、『中國音韻學研究』（再版 1948）は“郡”とする。それは原本の Karlgren (1915-1926) が郡とするためである。Karlgren (1915) の p.96 に“kien：見，溪，郡，疑，曉，匣，影，喻”とあり、p.105 に“Initiale 3, 郡 kiu”とある。本対談では、引用箇所ではそのまま“郡”とするが、議論においては群とする。

同一個字可以又放在送氣清聲母下，又放在濁聲母下。這就把郡母 >k>k' 這種接繼演變的假說乾乾淨淨的打消了<sup>4</sup>。

中村：まず、誤植があります。最後から4行目の「那麼就設法兒解釋爲什麼……」の部分ですが、「設法兒」という表現は見慣れません。フランス語の原文を見ると、「il serait incompréhensible pourquoi… (どうして…なのか理解できなくなる)」とありますから、漢訳はおそらく「没法兒」の誤植でしょう。ところで、上の説明によれば、Ka氏は群母が現代諸方言で無声化する際に、群>k、群>k'のように変化した（後者は群>k>k'ではない）としたわけですが、そうすると群母の音価をどう考えるかが問題になります。無気であったか有気であったかということですが。

吉池：長い引用となってしまうので、引用は割愛しますが、誤解をおそれず重要な点のみについて次のようにまとめてみました。下記の①②より、g>k'よりもg'>k'のほうが自然な音変化であるとするようです。

①一字両読の面からみれば、gとk'の一字両読よりもg'とk'の一字両読のほうが自然である。

②現代方言への変化が無理なく理解できる。

客家方言への変化：b', d', g' → p', t', k'

呉方言への変化：b', d', g' → b, d, g

\*【対談者注】現代呉方言の有声破裂音は語頭において[tʰ][dʰ]のように有聲の息hを伴うとされる。Ka氏も有聲の息を認めるが微弱であるためb, d, gのように表記する。

官話方言への変化：平声でb', d', g' → b', d', g' → p', t', k'

仄声でb', d', g' → b, d, g → p, t, k

中村：要するに中古音の有聲音は現代諸方言（客家方言および官話方言の平声）で気音を持つ音としても現れるわけですが、その“現代方言の気音”の由来を中古の有聲音の“気音”に求めるということですね。ところで、官話方言への変化の箇所ですが、仄声においてなぜ

---

<sup>4</sup> Le fait que, dans la majorité des dialectes, l'initiale kiun a des descendants sourds ne cause pas de difficultés. De même, le g indo-européen est représenté régulièrement par k en germanique. Mais la question devient plus compliquée, quand il s'agit des aspirés, par ex. k'. Il faudra alors supposer ou le passage direct kiun > k', ou bien un passage préliminaire kiun > k, suivi de k > k'. Cette dernière supposition est tout à fait inadmissible, car dans tous les dialectes il a toujours existé un k, sourd faible, et il serait incompréhensible pourquoi k faible, né de kiun, se transformerait davantage, tandis que tous les autres k en sont restés là. Et d'ailleurs il se trouve des obstacles dans les anciennes sources. Ainsi, on rencontre déjà dans le Kouang yun beaucoup d'exemples d'une prononciation chancelante, de sorte qu'un mot a été rangé et sous la sourde aspirée et sous la sonore. Cela exclut nettement la supposition d'un développement successif: kiun > k > k'. Le passage a dû être direct: kiun > k'. (p.358)

無気音となるかということが問題になりますね。

### 声調調値と声母の無気音化

吉池：その点について、中村さん、以前に言及していましたね。たしか「カールグレン「Compendium」を読む(2)」(『KOTONOHA』58、2007年9月、1-5頁)でしたか。

中村：そうです。私は調値が関係していると考えました。関係部分をそのまま引用しておきます。

カールグレン、マスペロ両氏が触れなかった問題として、多くの現代方言に見られる無声化の状況(平声で有気、他の声調で無気)がいかなるメカニズムで形成されたのか、という問題がある。カールグレンが考えたように、無声化の前段階として、平声で有声有気音、他の声調で有声無気音である段階を想定しなければならない。それではそのような段階はいかにして生じたのか。私見では、調値の違いがこの状況をもたらしたと見なすのが妥当であろうと思う。唐代長安音において、平声は最も低い調値であり、有声の氣息を伴っていたが、他の声調はおおむね高い調値であったため、いくぶん喉の緊張を伴い、有声の氣息がほとんど出なくなった、と考えられる。唐代音の調値については、従来から声明、古写本の声点、文献の記述などを利用した金田一春彦(1951)によって、平声(とりわけ平声濁音)が低調、上声が高調、去声が上昇調、入声が短促調という調値が想定されていたが、高山倫明(1981)はそれに更なる裏付けを与えた。『日本書紀』古写本の声点を調査した高山氏は、唐代長安音を利用した万葉仮名が用いられている部分(いわゆる $\alpha$ 群)の歌謡において、低調を表す声点が平声字に付され、高調を表す声点が上声字・去声字に付されていることを明らかにした。状況証拠を丹念に集めた金田一(1951)の所論が、ここで信頼に足る対音資料を得たわけである。過去の自説を簡潔にまとめた金田一(1980)では、平声と他声調を「平仄」という対立でとらえる現象について次のように付言している。

平とは低く終わる声調のことである

仄とは高く終わる声調のことである

つまり「平仄」は「低⇔高」の対立だというのである。中古音の有声音が官話系方言などにおいて、平声では無声有気になり、仄声では無声無気になっているのも、その調値が要因であったと考えられる。(『KOTONOHA』58、3頁より)

以上ですが、この説は中古の有声音が有気であったというKa氏の説を前提としています。当然、このKa氏の説が妥当かどうかという点についても詳しい検討が必要です。

吉池：Ka氏の有声有気音説そのものを否定したものとしてMaspéro(1920)が有名です。つぎにMaspéro氏の説を確認しましょう。

### Maspéro 氏の説—中古の有声無気音から有声有気音へ—

吉池：Maspéro(1920; 2005)<sup>5</sup>によると、7世紀唐初の梵漢対訳において通常は梵語の有声有気音（dh など）と有声無気音（d など）を区別せずに漢語の全濁音声母で音訳するが、一部の音訳者は、梵語の有声有気音を音訳した全濁音声母の漢字に、たとえば **Buddhaya** 孝陀(重)夜のように、「重」とし、この「重」について「喉音を帯びる」とするとの注記があるとのこと。Maspéro氏はこれにより、唐初において漢語の全濁音声母は有声無気であったが、「重」という注記により、梵語の有声有気に対応することを示したとします。

可是梵文不送氣濁音和送氣濁音在中古漢語裏却没有相應的單獨聲類，因為中古漢語只有一類全濁音，只好用它來同時對譯梵文的兩類。通常的情況是，漢語的全濁音不加區別地既用來對譯梵文的不送氣濁音，又用來對譯梵文的送氣濁音，並不考慮多寫幾個字來限定一下，就像下面的例子：

勃馱喃 **Buddhānām**  
婆伽婆帝 **Bhagavate**  
勃地 **Bodhi**  
{田比}目帝 **bhimukte**

可是有些經文就譯得更為精確，當需要用漢語的全濁音來對譯梵文的送氣濁音時，就在後面跟着寫一個“重”字，附注云“重者帶喉聲讀”，這指的是送氣，在中國的語音學家看來是一種“喉聲”。

菩（長）陀（上重）夜 **bu-da**（送氣=d'a）-'ia=**Bodhaya**  
孝陀（重）夜 **bušt-da**（送氣=d'a）-'ia=**Buddhaya**  
【以下省略】（26-27頁）

中村：一見説得力があるようにみえますが、どうでしょうか。梵語の有声有気音と漢語の全濁音を比べて、梵語の有声有気音の有気がかなり目立って（大きく）聞えたため「重」と注記したとも考えられます。

吉池：あえて音声記号で表現すれば梵語[dh]と漢語[dʰ]というような違いで、漢語の全濁音にも気音はあったとみることは可能だということですね。

中村：そういうことです。ところで、Maspéro(1920; 2005)は中古漢語の有声無気音は後に有声有気音となったとするようですが、その根拠についてどのように述べていますか。

吉池：8世紀から10世紀になると、不空とその一派は、漢語の全濁音で梵語の有声有気音

---

<sup>5</sup> Maspéro, H. (1920) “Le dialecte de Tch’ang-ngan sous les T’ang,” *Bulletin de l’Ecole Française d’Extrême-Orient* 20: 1-124. 本対談の議論においては、聶鴻音訳(2005)『唐代長安方言考』（世界漢學論叢）北京：中華書局の漢文と頁数を提示する。

(dh など) を音訳し、漢語の開音節の鼻音声母 (韻尾に -ng や -n や -m が付かない音節) で梵語の有声無気音 (d) などを音訳するようになります。これをもって、8 世紀から 10 世紀には漢語の全濁音は気音を帯びたとします。

不空和前人一様、也用漢語的全清音和次清音來對梵文的不送氣清音和送氣音，可是他却一律用漢語的全濁音來對譯梵文的送氣濁音，而用漢語的鼻聲母陰聲字來對譯梵文的不送氣濁音，又用漢語的鼻聲母陽聲字來對譯梵文的鼻音。 (29 頁)

【以下は不空の字母表より。原文の一部をあげる】

ga 誼 ŋga    ja 慝 ŋzia    da 拏 ndja    da 娜 nda    ba 麼 mbua  
gha 伽 gj'ia    jha 鄢 dz'a    dha 茶 q'a    dha 駄 d'a    bha 婆 b'ua

中村：長安一帶の西北方言で、誼 ŋga、娜 nda、麼 mbua のように音声的に非鼻音化がおこったことは有名ですね。非鼻音化したほうは無気音でしょうから、梵語の有声無気 (b,d,g など) に当てることは理解できます。

吉池：漢語の全濁音、伽、鄢、茶、駄、婆などを、梵語の有声有気音 (gha、jha、dha、dha、bha) に当てる方はどうでしょうか。Maspero 氏は、伽 gj'ia、鄢 dz'a、茶 q'a、駄 d'a、婆 b'ua のように有声有気音となっていたと解釈しますが。

中村：その説にも無条件では賛同できません。さきほど 7 世紀初に全濁音が無気音であったと断言はできないと言いましたが、この場合も同様です。仮に漢語の全濁音が 7 世紀初にもそれ以降にも (梵語に比べると) 弱い息を伴っていたと仮定してみましましょうか。7 世紀初には梵語の有声音には漢語の全濁音を対応させますが、一部の音訳者は梵語の有声有気音が強い息を持っていることを強調するために「重」という注記をしたわけです。そして 8 世紀以降には漢語の長安音では非鼻音化が起こったために、梵語の有声無気音に対して漢語の鼻音声母を対応させ、残った梵語の有声有気音には漢語の全濁音 (弱い息を持つ) を対応させたこととなります。このような対応はごく自然なことだと思いますので、漢語の全濁音が無気から有気へと変じたという Maspero 氏の説は他の根拠が付加されない限り決定打にはならないのではないのでしょうか。つまり、中古漢語の全濁音が有気音であるという Karlgren 氏の説は Maspero 氏によって打破されたとは言えません。

吉池：つまり、Maspero 氏のように漢訳仏典に用いられた音訳漢字のみで決定的なことは言えないということですね。Maspero 氏以降の説には検討に値するものはありますか

中村：森博達氏の日本書紀 α 群の対音資料による研究があります。そこでは 8 世紀初めの長安音では全濁音が無気音に近いものであったと述べられています。これにはやや詳しい検討

が必要なので、次回に改めておこなうことにしてはいかがでしょうか。

吉池：では今回はここまでにして、今回は Maspéro 氏以降の説、特に森氏の説を中心に検討しましょう。